

2018年2月		
筆者	所属	千葉県農林総合研究センター 水稲・畑地園芸研究所 水稲温暖化対策研究室
	職名及び氏名	上席研究員 太田和也
題名	水稲「コシヒカリ」の疎植栽培で収量と玄米品質を低下させないためのポイント	
備考	【表説明】 中干しによる過繁茂と倒伏の防止効果	

担い手に作付が集中している状況において、育苗用の設備を増やさずに作付面積の拡大を図る手段として疎植栽培が有効です。栽植密度を坪当たり 48 株（株間 23cm）～37 株（株間 30cm）とすることにより、苗箱数を 2～4 割削減することができます。しかし、疎植栽培では収量が減少したり、登熟のばらつきによって玄米外観品質が低下する事例が見受けられます。そこで、「コシヒカリ」を用いた疎植栽培で高品質米を安定的に生産するためのポイントを解説します。

### 1 基肥は増やさず、活着の良い健苗を用いる

栽植密度が低いので、収量を維持するためには穂数を確保することが重要です。しかし、基肥窒素を増やして穂数を確保しようとするとう倒伏の危険性が高まります。そのため、速やかに活着し、分げつの発生が旺盛となる健苗を用いて茎数増加を図ります。一箱当たり播種量を増やす高密度播種苗は苗の黄化が進みやすいため、疎植栽培と組み合わせる場合には注意が必要です。

### 2 植付本数は減らさない

疎植栽培の場合、10a 当たりに必要な苗箱数は 11～15 箱です（乾籾 140g 播きの場合）。苗箱数をさらに削減しようとして植付本数を減らすと茎数・穂数が不足し、収量や玄米外観品質の低下を招きます。植付本数は減らさず、4～6 本/株とします。

### 3 中干しにより倒伏と遅れ穂の発生を防止する

倒伏と遅れ穂の発生を防止し、玄米外観品質を低下させないためには、籾数を 32,000 粒/m<sup>2</sup>以内とする必要があります。そのためには中干しを必ず行います。中干しは移植後 40 日頃に開始し、足が潜らない程度まで乾かします。なお、最近は気温が高く、幼穂形成期が早まる傾向にあるので、中干しできる期間が短くなっています。排水の悪い圃場では溝切りが有効です。



中干し実施



中干し無し

「コシヒカリ」の疎植栽培（37 株/坪植え）における中干しによる過繁茂と倒伏防止の効果

注 1) 5 月 8 日移植の成熟期の様子

2) 場所は千葉県農林総合研究センター水稲温暖化対策研究室（千葉市、壤土）